

古文書を読む会学習記録

作成日 2019年6月28日

開催日	2019年6月27日	時 間	10:00~12:00
場 所	区民活動センター	出席人数	15名
講 師	真田 雅行氏	作成者	佐藤 和広
テーマ	第二学習 北槎聞略② (大黒屋光太夫漂流記録)		
概 要	<p>北槎聞略 卷二 瓢海送還始末 上</p> <p>天明二年(1782年)壬(みずのえ)寅年 十二月・・勢州(伊勢国)亀山領白子村の百姓彦兵衛が持たる船神昌丸に紀伊殿の廻米并に江戸の商人への商品を積み出帆。</p> <p>船頭は大黒屋光太夫、乗組員は17人。</p> <p>13日夜半・・駿河の沖で俄かに北風吹きだし、西北の風もみ合い風浪激しく舵を損傷。嵐いよいよ勢いを増し、沈没も免れない状況に陥ったため、乗組員一同髻(もとどり)を切り、日頃念ずる神仏に祈誓をかける。しかし風は次第に大いに吹き荒れ、波が山が崩れるようになってきたので最後の手段として帆柱を切り倒し、商品の積み荷を捨てた。7.8日か東へ東へと吹き流されついには山も見えず、果てしない大海原へと漂い出た。</p> <p>翌卯三月・・何処からか海水が浸水してきて船が沈み始めた。各々必死の覚悟を決めたが、船頭親父の三五郎がかかる時にこそ、手をつかねて死をまたんよりは神籤をとりて何処から浸水しているのかはかろうとす。その結果浸水箇所が分かり木綿をつめて危難を逃れた。</p> <p>船中には積み荷の米が大量にあるので糧食には困らないが、二月の末より飲水が乏しくなった。大事に飲んだにも拘わらず遂に飲み尽くし、渴きに耐え兼ね海水を飲もうとしたほどになった。幸いにその夜雨が降った。雨水を貯める工夫も施した。</p> <p>7月・・水主幾八腹痛下痢が続く、15日の夜に死す。乗組員いずれも鳥目になっているので、夜明けを待って死骸を沐浴させ、桶に入れ白木綿をつめ海中に沈めた。</p> <p>20日早朝、小市寅卯の方角を見るに島を見る。碇をおろして伝馬船に乗り磯辺に乗り付けた。一円に木も生えてない小島なり。荷物を降ろしている間に此方の船を見かけ、島人ら11人集まった。何れも髪はザンバラで髭短く赤黒い顔で素足、鳥の羽を綴った膝が隠れるほどの衣を着て。人とも鬼とも実に弁えがたかった。一向に言葉通ぜず、試みに銭を与えたら受け取ったので次に木綿を与えたら、喜びたる体にて光太夫の袖を引きこなたへ来たれという体を示す。五人を選び島人のあとに従わせた。半里ほど行くと向こうの方にビロードの服を着た二人が鉄砲を持って立っていた。言葉は通ぜずともこなたへ来るべしといふさまなのでついて行った。麴むろの如きものの前に着く。戸を開き中に入る、横二間半長さ六七間計りに地を掘り梁を組み合わせ横木をわたして草にて屋根を葺く。食事は一尺ばかりなる魚を草に包んで潮蒸にしたものを戸板の如きものに載せ、汁は黒百合の根を水にて煮て搗いたものを水にてゆるめたものなり。是此の地の常食なり、他にタラ、ウニ、海獣の肉、雁鴨を食べる。</p>		
次回予定	2019年7月11日 10:00~12:00 於:金沢区民活動センターAB会議室 第一学習 野島浦鈴木家文書⑱		